

春花秋月—

月が最も美しい季節は秋。

「月」といえば「秋の月」をさすほどである。

秋の月はかぎりなくめでたきものなり

徒然草

ふるさとの風 長月



月の神への祈り 神話に遊ぶ

—月読宮と月夜見宮

日本語での「月」は、天体としての月を示すと同時に、暦の単位を示す漢字でもある。英語では前者が moon, 後者が month となっていて、一見違った単語に見えるが、もとは同じである。満ち欠けを繰り返す周期性を持つ天体としての「月」が、暦の「月」を生むことになったわけである。 渡部純一『面白いほど宇宙がわかる 15の言の葉』

「^{つきよみ}月読」とは、月を読むこと。つまり月齢を数えるとされ、この言葉には、暮らしに欠かせない暦との深い関わりの歴史がある。

月と地球の最接近と満月が重なる日に見られる「スーパームーン」。今年八月十一日未明、台風一過の夜空に特大の満月が姿を見せました。

～月にえをさしたらばよき団扇哉～

月に柄を付ければ良い団扇になるだろうな

荒木田守武とともに俳諧の祖といわれた山崎宗艦が、遊び心たっぷりに詠み上げた句です。夏の月がとても涼しげに感じます。

Prologue

太古から変わらない月―。

人は、まだ言葉も持たなかった頃から、月の姿に魅了され、また季節の移り変わりを感じてきた。月がその姿を変えるのは、太陽と地球と月の位置が変わるため。

文字の読める人が少なく、暦も普及していなかったころ、人々は月の満ち欠けで日を数え月の動きを基にした太陰暦を農耕の目安としていたのである。

稲は、命の根。天から授かった神聖な食べ物である。

天孫降臨の際、天照大御神は瓊瓊杵尊ににぎのみことに高天原の「斎庭の稲穂」ゆにわ いなほを授けた。

瑞穂の国とよばれる日本。長い伝統に培われた稲作は、神から授けられた神聖な営みであり、米には「稲魂」いなたまという魂が宿ると信じられてきた。

伊勢の国は、およそ二千年前神宮のご鎮座により幕を開けた。

―ここにおわすのは、万物を育む太陽を司る最高神「天照大御神」である。―

天照大御神は、神宮の主祭神こうたいじんぐう ないくう。皇大神宮（内宮）に祀られ、太陽にたとえられる。

豊受大神宮（外宮）とようけだいじんぐう げくうに祀られるのは、豊受大御神。

天照大御神の大御饌おほみけを司る御饌都神みけつかみであり産業の守護神である。

神宮にはこの両宮を中心に百二十五もの社が存在し、年間の祭りは千数百回にのぼるといふ。

その底流には、遠い昔から日本人が営んできた農耕を基盤とした国の平和への祈り、そして命の糧をもたらず自然を司る神への感謝の気持ちがある。

森羅万象、この世に存在するものすべてに神は宿る。

伊勢に祀られる八百万の神々。月の神様の宮は、ふたつ。

内宮別宮つきよみのみや月読宮。そして外宮別宮つきよみのみやの月夜見宮。

同じ祭神“月読尊”つきよみのみことを祀る。

“月読尊”の誕生は、想像することもできないほど遙か昔にさかのぼる。

Episode 1 古事記

神々の物語は、日本最古の歴史書『古事記』や『日本書紀』の神話の中で語られている。また、記紀だけでなく『風土記』『日本霊異記』などにも収められ、さらに口承によって今も大切に受け継がれている。

今から千三百年以上昔、和銅五年（712）太安万侶おおのやすまろが撰録した『古事記』には全部で三百二十一柱の神々が登場するといわれる。

古事記冒頭の一文である。

天地初めてあめつち発ひらけし時、高天原たかまのほらに成れる神の名は、天之御中主神あめのみなかぬしのかみ、次に高御産巢日神たかみむすひのかみ、次に神産巢日神かむすひのかみ。此の三柱こ みはしらの神は並独神みなひとりがみと成り坐して、身を隠したまひき。

—宇宙そして日本の始まり—

宇宙の初め、混沌としたものの中から天と地が初めて分かれた時、天地を主宰する天之御中主神、次に万物の生成を司る高御産巢日神、同じ霊力をもった神産巢日神の三柱の神が誕生した。

その後、新たに宇摩志阿斯訶備比古遲神と天之常立神が加わり、この五柱の独神は特別に貴い存在として別天神と呼ばれた。

その後、神世七代と呼ばれる二柱の独神と四柱の男女対の神が次々と登場し、最後に現れた一対の神が、男神の伊耶那岐神と女神の伊耶那美神であった。

—国生み—

この二柱の神は、大八島国をはじめとして多くの島々を生み、葦原中つ国（地上世界）を形成した。いわゆる“国生み”であるが、その後、海、河、風、木、山などの神々を次々と誕生させていく。

伊耶那岐命と伊耶那美命が生んだ島は十四島、そして三十五柱の神を生んだとされる。

—黄泉の国—

しかし、伊耶那美命は、火の神の火之夜芸速男神（火之炫毘古神・火之迦具土神）を生んだ時に火傷を負い死んでしまう。

嘆き悲しんだ伊耶那岐命は黄泉の国（死者の国）に伊耶那美命を追っていくが、恐ろしく変わり果てた妻の姿を見て逃げ帰ってしまうのである。

—禊、そして三貴子の誕生—

黄泉の国から戻った伊耶那岐命は穢れを落とすために筑紫（宮崎県）の日向の橘の小門の阿波岐原で禊を行う。（これが、禊の始まりとされる。）

この時、多くの神々が現れ、最後に伊耶那岐命が左目を洗うと天照大御神、右目を洗うと月読命、鼻を洗った時に建速須佐之男命が誕生した。

この三柱の神が“三貴子”すなわち最も貴い神である。

是に左の御目を洗ひたまふ時、成れる神の名は、天照大御神。次に右の御目を洗ひたまふ時、成れる神の名は、月読命。次に御鼻を洗ひたまふ時、成れる神の名は、建速須佐之男命。

—太陽・月・海 ～三貴子の分治—

伊耶那岐命は、天照大御神に高天原を、月読命には夜の国を、そして須佐之男命には海の国を治めるように命じた。これを三貴子の分治という。

『古事記』には宇宙の始まりから月読命の誕生までがこのようなあらすじで綴られている。

Episode 2 two of Tsukiyomi ～二つのツキヨミ～

一月読宮—



月読宮は、内宮から約 1.8 キロ、沿道に石灯籠が並ぶ御幸道路沿いの森に鎮座する。

明治四十三年（1910）、明治天皇行幸の際に整備された御幸道路は別名御成り街道。外宮と内宮を結ぶ。

鳥居をくぐり樹木が生い茂るゆるやかなカーブの参道を進むと、四つの宮が一行に並ぶのを目にする。

向かって右（東）から左（西）に、月読尊の荒御魂^{あらみたま}を祀る「月読荒御魂宮」、一回り大きい宮は月読尊の和御魂^{にぎみたま}を祀る「月読宮」。そして父神伊弉諾尊^{いざなぎのみこと}を祀る「伊佐奈岐宮」、母神伊弉冉尊^{いざなみのみこと}を祀る「伊佐奈弥宮」と立ち並ぶ。

参拝は、「月読宮」を最初に「月読荒御魂宮」「伊佐奈岐宮」「伊佐奈弥宮」の順で行う。

百二十五社の中でも四つの宮が並ぶのはここだけ。唯一神明造の神殿が並び立つ姿は壮観で神々しい。最高神天照大御神の弟神の月読尊が祭神であることから、内宮別宮の中では天照大御神の荒御魂を祀る荒祭宮^{あらまつりのみや}に次ぎ高い格式であるとされる。



現存する神宮の最古の記録である延暦二十三年（804）の『皇大神宮儀式帳』には、「月読宮一院。正殿四区之中。」と記述があり、一囲の瑞垣内に四つの宮が祀られていたことが窺われる。

さらに、延長五年（927）の延喜式によれば、「伊佐奈伎宮二座、月読宮二座」とあり、伊佐奈伎宮と伊佐奈弥宮、月読宮と月読荒御魂宮が、一院として祀られていたと考えられる。現在の様に四つの宮にそれぞれ瑞垣が巡らされたのは、明治六年（1873）以降であることが『神宮要綱』の記述から推測できる。

また、旧地は現在地の北方、久世戸坂下の二光の森との説もあり、洪水等で二度の移転後現在地に鎮座したとされる。

月読尊は、夜の国を治め月齢や暦を読む農耕と漁獵の神。

また、伊弉諾尊・伊弉冉尊の夫婦神を祀ることから夫婦円満や縁結びを願い訪れる人も多い。今年平成二十六年は、月読宮の遷宮の年。昨年の両正宮に準じて斎行される。

一般的に古殿地は東と西（左右）にあるが、宮が並んで建てられているために南と北（前後）で執り行われる。

お白石奉獻は九月二十八日、四郷奉獻団により川橈を用い陸引きで行う。

—月夜見宮—

月夜見宮は、外宮で唯一宮域外にある別宮。外宮からほど近く伊勢の市街地に鎮座する。祭神は、内宮別宮月読尊と同じ月夜見尊と月夜見尊荒御魂で同一社殿に祀る。内宮側は“月読宮”と表記するのに対し、“月夜見宮”と日本書紀の表記法を用いている。読みが同じであることから、地元では月読宮を“ゲツドクサン”、月夜見宮を“ツキヨミサン”と呼び分けることも多い。



平安時代初期には、外宮摂社の筆頭であったが、鎌倉時代の承元四年（1210）土宮の例にならい別宮に昇格したとされる。当初は、二座をそれぞれの社に祀っていたが別宮昇格の翌年一つの社に同座となった。

古来、この辺りは高河原と呼ばれ稲作とつながりの深い社であったという。また、『勢陽五鈴遺響』によれば、豊受大御神が丹波の国より遷幸された際、三か月間仮に鎮座した場所であり、また、神宮の神税を司る神厨がおかれていたとある。さらに、斎王の宮殿や離宮院も建てられていたが、度重なる水害により延暦十六年（797）度会郡湯田郷宇羽西村（現小俣町）に移転した事が理解できる。

宮域の三方をめぐる堀は宮川の支流の名残り。木々が生い茂る自然豊かな宮域は、街中とは思えない静けさが保たれている。

宮柱立てそめしより月よみの神行き交ふ中の古道 『勢州古今名所集』



月夜見宮から外宮北御門に真っ直ぐに伸び両宮を結ぶ神路通り。

かつては神の行き交う道とされ不浄の者はその中央を通ることを遠慮したといわれる。

地元では、月夜見宮の石積みの石が馬に変わり、その白馬に乗って月読尊が夜ごと豊受大御神の元へ通うという伝説が残されている。

女性にゆかりのある”月の神様”。

月の満ち欠けの周期は女性の体に影響を与えることから、参拝する女性が近年増えているという。

平成二十七年春とされる月夜見宮の遷宮。

お白石奉献は同年二月二十二日、地元宮後奉献団により実施される。

Episode 3 月の女神

月は世界の神話の中にも度々登場する。

ギリシア神話に登場する月の女神アルテミスは、弓矢を肩に森を歩く美しい神。手にしているのは、新月の銀の弓。狩猟と純潔の神とされ、森の野生動物の守護神でもある。ギリシア神話の最高神ゼウスと美しい女神レトのあいだに生まれ、芸術と光明の神アポロンの双子の妹。兄は太陽の神、妹は月の神である。

セレネも月の女神。アルテミスと同一視され、アルテミスの別名ともされる。「セレネ」は、「月」の意で、“selenology”は、「月の科学」を意味する。ローマ神話のルナも月の女神で、ヨーロッパの多くの言語で現在も月のことを指す言葉となっている。また、樹木と豊穡の女神ディアナも月の女神である。

Epilogue

月は、神秘的な象徴として詩歌にも詠まれ、信仰の対象ともなってきた。

天橋も長くもがも 高山も高くもがも
月読の持てるをち水 い取り来て 君に奉りて をち得てしかも

『万葉集 卷第十三 三二四五』

天の梯子の長いのがあればよい 高山の とびきり高いのがあればよい
ツキヨミの持っている若水を取って来て 君に捧げて 若返っていただきたいものだ

『万葉集』の中で月読は、若返りの霊水「変若水」を持つ者として謳われている。欠けては再び満ちる月は、再生を現し若返りの力をもっているとされていたのである。

月の神様、ツキヨミー

月に祈りを捧げた、古えの人々ー

悠久の時の流れの中、神話のロマンに思いを馳せる。

陰暦八月十五日の満月は、「中秋の名月」として愛でられます。
澄み切った秋の夜空に現れる十五夜の月の姿は格別です。

神宮観月会
平成26年9月8日17時半
外宮勾玉池奉納舞台

ふるさとの風 長月
月の神への祈り 神話に遊ぶ

—参考文献—

- 「日本古典文学全集1 古事記 上代歌謡」 小学館 918/ニ/1
- 「新編日本古典文学全集8 万葉集 卷第十～卷第十四」 小学館 918/シ/8
- 「群書類従 第1輯 神祇部」 塙保己一/編 続群書類従完成会 081/グ/1
- 「勢陽五鈴遺響 5」 安岡親毅/著 三重県郷土資料刊行会 L290/ヤ/5
- 「神宮要綱」 神宮司庁/編 神宮司庁 L174/ジ
- 「神都名勝誌 卷一～卷三」 神宮司庁/編 国書刊行会 L243/シ/1
- 「神都名勝誌 卷四～卷六」 神宮司庁/編 国書刊行会 L243/シ/2
- 「伊勢参宮名所図会」 藤閑月/画・編 国書刊行会 L290/シ
- 「伊勢市史 第1巻 古代編」 伊勢市/編 伊勢市 L243/イ/1
- 「伊勢郷土史草 第33号」 石井昭郎/編 伊勢郷土会 L243/イ/33
- 「伊勢神宮 悠久の歴史と祭り」(別冊太陽) 清水潔/監修 平凡社 L174/イ
- 「伊勢神宮の智慧」 川合真如/文 宮澤正明/写真 小学館 L174/カ
- 「伊勢神宮ひとり歩き」 中村葉子/著 中野晴生/写真 ポプラ社 L174/ナ
- 「永遠の聖地伊勢神宮」 千種清美/著 ウエッジ L174/チ
- 「古事記」(別冊太陽) 千田稔/監修 平凡社 9132/コ
- 「図説古事記」 石井正己/著 篠山紀信/写真 河出書房新社 9132/イ
- 「図説地図とあらすじでわかる! 古事記と日本の神々」
吉田敦彦/監修 青春出版社 9132/ズ
- 「図説地図とあらすじでわかる! 古事記と日本書紀」
坂本勝/監修 青春出版社 9132/ズ
- 「月に恋」 ネイチャー・プロ編集室/編 PHP 研究所 4460/ツ
- 「面白いほど宇宙がわかる 15の言の葉」 渡部潤一/著 小学館 440/ワ





図書館だより 9月号 No.150 増刊 ふるさとの風 長月 平成26(2014)年9月1日発行

(編集・発行) 伊勢市立伊勢図書館 指定管理者/株式会社 図書館流通センター (住 所) 〒516-0076 伊勢市八日市場町 13-35
(電話) 0596-21-0077 (FAX) 0596-21-0078 (ホームページ) <http://iselib.city.ise.mie.jp/>

© 2014 mami ishikura